

【特集②】

児童養護施設における 長期的な心理支援

塩谷隼平*

本稿では児童養護施設における長期的な心理支援について考察を行った。児童養護施設に入所している子どもは基本的信頼の欠如という課題を抱えており、その獲得のためには安心感のある安定した生活の長期の積み重ねが必要である。施設における心理支援でも長期的な視点が大切であり、X 児童養護施設では個別心理療法を中心にオーダーメイド的な心理療法を実施している。長期的な心理療法のなかで、子どもが表現するテーマも発達段階に応じて変遷していく。また、心理療法だけでなく、子育て支援の視点をもってケアワーカーの養育能力を高めるようなコンサルテーションをすることも重要な役割である。さらに、子どもが成長するためにはいろいろな距離感をもった大人の存在が大切であり、心理職が施設内で祖父母的な役割をとることが、長期的な心理支援をしていく際に役立つと考えられる。

キーワード：児童養護施設、長期的、心理支援

1. はじめに

私が非常勤の心理職として勤務している X 児童養護施設では、毎年 12 月の終わりのある決まった日にもちつき大会が開催される。コロナ禍中はオープンに開催できないこともあったが、普段は施設に在籍している子どもや施設職員、子どもの親の他、地域住民や大学生のボランティアなど、多くの人が参加するにぎやかなイベントである。そこに施設の退所生も顔を見

せる。前もって連絡してから訪れる退所生もいれば、連絡なしに突然来る退所生もいる。私が X 施設の心理職になってから 20 年以上たち、退所生のなかには在所中に心理療法を担当していた子どもも含まれる。子どもといってもすっかり大人になっており、ある男性は妊娠中の妻を連れてきて幸せそうな笑顔で紹介してくれた。ある男性も家族を連れてきて、マイホームを建てたことを少し照れながら報告してくれた。また、仕事で外国人と関わるが増え、「マジで英語をしっかりと勉強しておけばよかった」と

* 東洋学園大学

なんとも頼もしい後悔を語る青年もいた。多くの退所生が自分の子ども時代を知る職員と挨拶をかわし、近況報告や施設にいた頃の思い出話に笑顔で花を咲かせていた。彼らにとって、子ども時代を過ごした施設は「実家」の代わりである。退所生が事前の予約もなく気軽に戻ってこられるように、もちつき大会は同じ日程で繰り返されている。

このように子どもたちが立派に成長した姿を見ることができるのは児童養護施設の職員にとって大きなやりがいであり、最大のご褒美である。また、心理職にとっても心理療法で関わっていた子どもの大人になった姿を見ることができるのはうれしいことであり、他領域の心理職にはあまりない児童養護施設ならではの魅力のように感じる。本稿では、X 児童養護施設で 20 年ほど心理職を続けてきた経験をもとに、児童養護施設における長期的な心理支援についての一考察を述べたい。なお、本文中に出てくる事例は個人が特定できないように改変したり、いくつかの事例を組み合わせたりしている。

2. 児童養護施設における長期の支援

児童養護施設は児童福祉法第 41 条で定められた児童福祉施設で、なんらかの理由で親と暮らすことのできない概ね 2 歳から 18 歳までの子どもが入所して生活している。全国に約 600 か所あり、こども家庭庁（2024）によると、2023 年には約 23,000 人が在籍している。入所児童の平均年齢は 11.8 歳で、入所時の平均年齢は 6.7 歳、平均在所期間は 5.2 年となっているが、幼児期に入所して高校卒業までの約 16 年間という長い時間を施設で過ごす子どもも少なくない。また、2024 年の児童福祉法の改正により、それまで原則 18 歳、最長 20 歳であった年齢制限が撤廃され、子どもたちが自立できるまで在籍が可能となり、施設から専門学校や

大学に通う子どももいる。さらに、施設退所後のアフターケアも義務づけられており、児童養護施設の子どもの支援は長期にわたる。

あるとき、X 児童養護施設を退所してから何十年も経つ方から連絡が入った。末期癌を患っており、ターミナルケアとして自分史を作成するなかで、X 施設での生活を思い出したとのことで、その頃をわずかに知るケアワーカー（直接処遇職員）が入院先まで会いに行った。決して平坦ではなかった人生をふりかえるなかで「自分がもっとも人らしく生きられたのは X 施設にいたときだった」という思い出が語られた。このようなケースがあることを考えれば、児童養護施設における支援はその人が亡くなるまで続くと言えるのかもしれない。

3. 児童養護施設の子どもの抱える課題

児童養護施設は、もともとは親のいない子どもの保護を目的とした施設であったが、現在は両親ともいない子どもは入所児童全体の 3.3% に過ぎず、95.4% の子どもは両親または父母のどちらかがいる（こども家庭庁、2024）。しかし、児童虐待の問題をはじめ、親と一緒に暮らすことが困難なために分離され、施設に措置されている。入所児童の 71.7% に虐待経験がある（こども家庭庁、2024）とされているが、それ以外の子どもたちもはっきりと虐待とは言えないが過酷な出生状況や養育環境を経験しており、被虐待児の割合はもっと高いというのが施設職員の実感である。そのため、施設の子どもの多くは虐待によるトラウマの問題や、不安定な養育環境によるアタッチメントの問題を抱えており、それを起因として様々な心理症状や、生活上・対人関係上のトラブルが生じる。

トラウマやアタッチメントの課題についての詳細は他の論考に任せ、ここでは私が強く感じてきた子どもが抱える問題について述べたい。

小学生男子の心理療法の時間に、施設のホールで卓球をしていたときのことである。震度1か2くらいのごく小さな地震が起きた。私は何気なく「地震だね」と言うと、彼は血相を変えてホールから走り出た。追いかけると裸足で玄関の外まで逃げおり、顔面蒼白で立ちすくんでいる。話を聞くと「地震が本当に怖い。何か倒れたり、落ちたりしたら必ず自分の上に落ちてくると思う」と語った。また、「雷も怖い。必ず自分に落ちると思う」とも話した。確かに地震も雷も怖い。しかし、自分だけが被害にあうと想定する人は少ないのではないだろうか。

Erikson (1963) は、ライフサイクル論における最初の発達課題として基本的信頼の獲得を提示した。基本的信頼とは自分が存在している世界が常に同じ連続性を有していることへの期待とその世界で生きていく自分自身の能力への信頼から成り立っている。基本的信頼を獲得している人にとっては空気のようなものであり、意識されることは少ない。多くの人は電車で隣に座った知らない人が急に自分に殴りかかってくるとは思わないし、なぜ、殴りかかってこないかの理由について考えることもない。そんなふうに、この世界に対して漠然とした安心感や信頼感をもって生きている。そして、それは乳幼児期の養育者との特別ではないごく普通の関係のなかで無意識的に獲得されていく。

逆境的な養育環境にあった施設の子どもたちは、その基本的信頼が欠如しており、たとえ獲得していたとしても非常に脆弱である。自分が生きている世界の底が急に抜けてしまうような恐怖感、また、何か起きたときに自分以外の人たちはうまく対応できても、自分だけが対処できない不安感を抱えている。傍から見れば、普通の子どもとして楽しくにぎやかに生活していても、何かの拍子に基本的不信が顔を出し、それが様々な問題につながっていく。

4. 安心感のある安定した生活

そのような基本的不信の世界を乗り越え、基本的信頼を獲得するためには、安定した日々の生活の積み重ねが重要となる。いつもと同じ部屋で、同じ時間に起き、朝食を食べて、清潔に洗濯された服を着て、学校に行き勉強をして、帰ってきておやつを食べ、ケアワーカーに手伝ってもらいながら宿題をして、楽しく遊んで、夕食をとって歯を磨いて入浴し、いつもと同じ時間に寝る。その生活をいつもと同じ大人たちが支え、見守る。特別なことは何もない日常の繰り返しだが、それが子どもの基本的信頼を育んでいく。しかし、そんな生活経験のない子どもたちは、その安心感が本物なのか、いつまで続くのか怖くなり、あの手この手で破壊しようとする。いわゆる「ためし行為」である。それに対して、施設の職員たちは協働しながら、安定した生活を必死に守りぬぎ、安心感で包みこんでいく。もちろん、子どもが悪いことをすれば全力で叱る。しかし、悪いのは子どもがした行為であり、子どもは悪くない。自分が悪い子どもだから、自分がいらない子どもだから施設に入れられたと確信している子どもたちに「あなたたちは大切な存在である」というメッセージを言語的・非言語的に伝え続ける。ある子どもが心理療法の場で、「ねえ、なんでX施設の職員さんが僕を叱るのかわかったよ。僕が悪いことをしたからなんだね」と大きな発見をしたという顔で語ったことがあった。理不尽で予測不能な暴力に曝されてきた子どもにとって、自分の身に起こる出来事が予測できるようになることは大きな安心につながる。

安心感のある安定した生活を積み重ねることで、子どもたちにはこの世界は自分が生きていい世界かもしれない、そして、自分はその世界に生きていい存在であるという基本的信頼が少しずつ育まれていく。しかし、それに

は数年という長い時間がかかる。来る日も来る日も大きな穴の開いたバケツに水を汲むような徒労感がケアワーカーを襲う。だが、雪が降り続けば隙間の空いたネットの上にもだんだんと積もっていくように、日々のやりとりがゆっくりと重なっていく。そのような長期的な視点で子どもを支援できることが児童養護施設の強みである。

5. X児童養護施設における心理支援

そのような児童養護施設でのケアのなかで、心理職にできる心理支援や役割はなんだろうか。児童養護施設では、1999年に心理職（正式には心理療法担当職員）の導入が始まり、2011年には配置が義務化されたこともあり、多くの施設で心理職が子どもの心理療法やケアワーカーへのコンサルテーションを担っている。心理職が子どもの日常生活場面に入るか否か、ケアワークを担うか否かなど、働き方や心理療法のオリエンテーションに違いはあるが、複雑な問題を抱える子どもの心理支援において、短期的な心理療法だけでは不十分で、施設全体を治療的な環境にしていく環境療法や長期的な心理療法が必要となることは確かである。ここではX児童養護施設での心理療法の実践を紹介しつつ、長期的な心理支援の意義について考察していく。

児童養護施設の心理職には虐待を受けた子どもの心理療法のために導入された背景があるが、たとえ明確な虐待の既往がなくても、親と一緒に暮らせないことはどの子どもにとっても大変な状況であり、X児童養護施設では、すべての入所児童に対して心理職の担当を決めて、一部の幼児を除いて、子どもが希望すれば個別心理療法を中心にグループ心理療法などの心理療法を受けることができる。1年ごとの更新制度にしており、月に1～2回と頻度は少ないが、退所まで希望する心理療法を継続できる（塩谷、

2016）。私が担当した子どものなかには3歳から高校卒業までの14年のあいだ個別心理療法を継続し、セッション数が300回を超えたケースもある。とあるケースカンファレンスで幼児期の心理療法の経過を報告した際に、その問題の大きさから措置変更になるだろうとコメントされたこともあり、自立までX施設でケアできたことに大きな達成感もあった。

また、グループ心理療法も子どもたちの興味関心に合わせて選択できるように様々な種類を準備している。アートセラピーを行う「アートグループ」や、楽器演奏やバンド練習をする「楽器グループ」、その他にも「陶芸グループ」や「編み物グループ」「木工グループ」などを展開している。さらに、子どもが自由に来室できるフリースペースのような「オープンルーム」の時間も設定している。子どもたちは自分が選んだグループを1年間は続けるというルールのもと、担当心理職と相談しながら選択していく（塩谷、2016）。児童養護施設は治療施設ではなく生活施設であり、生活に身近な作業をとまなうグループ活動に心理療法的な意義をもたせていく方法はなじみやすいように感じる。また、夏休みには小学校高学年以上を対象に「性教育グループ」も実施している。

このような選択肢のなかで、個別心理療法だけを選ぶ子どももいれば、いろいろなグループ心理療法を順番に体験する子ども、また、両方を選択する子どももいる。なかには、まずはグループ心理療法に参加して、心理職へのアセスメントを行い、安心できる対象であると査定してから個別心理療法を希望する子どももいる。それぞれの子どもに合わせてオーダーメイド的に心理療法を準備するのがX児童養護施設の特徴である。

複数の心理職が働いているため、子どもの希望にそって個別心理療法の担当心理職を交代す

る場合もある。例えば、男子のケースでは、幼児期から小学生の時期を女性心理職が担当し、思春期に入った中学・高校時代を男性心理職が担当することがある。子どもの年齢に合わせて担当心理職が交代することで、それぞれの発達段階の課題に取り組みやすくなるように工夫している。

6. 長期の心理療法におけるテーマの変遷

個別心理療法を長期で継続する際、子どもの表現するテーマも発達段階によって変遷していく。幼児や小学生のときの心理療法は遊戯療法として進展し、遊びを通して自分の家族との関係や虐待体験が表現されることが多い。担当心理職に対して実親への感情を転移するケースも少なくなく、その関係性のなかで言語的・非言語的に子どもの家族への思いを理解していく。子どもたちは遊びを通してトラウマ体験を能動的に再体験し、解放し、再統合していく。

中学生時代は施設の子どもたちにとって潜在的な時期であり、それまで自分の過去や家族に向けられていたエネルギーが現在の生活における課題に向かい、部活動や学校での人間関係について話されることが多くなる。ときには恋愛が話題になるときもある。私は毎週日曜日に出勤しているが、この時期は部活動や友人との交流のために心理療法のキャンセルも多くなるなど、心理療法よりも現実生活に適応していくことが優先される。そして、中学3年生を迎えると、高校受験という施設の子どもにとって最大とも言える試練が立ちはだかる。現実場面では受験勉強や面接対策に懸命に取り組む一方で、心理療法では小学生の頃に戻ったようにやや退行的に遊ぶことも多い。受験という壁を乗り越えるためのエネルギーを補給しているようにも感じる。

高校時代の後半になると、退所後の進路選択の問題に向き合いながら、改めてエネルギーが自分自身に向かうことが多い。将来への期待や不安が語られるとともに、幼少期の思い出や家族への思いも言語化されていく。未来と過去を行ったり来たりしながら、最終的には自分がなぜ施設に入所することになったのかを中心に、人生の物語の再構成が行われる。乳幼児期のネグレクトにより入所していた高校生男子は、それまで「親からもらったものは何もない」と語っていたが、自分の名前を母親が希望をもってつけたことを思い出し、親から大切なものをもらっていたことに気づいていった。母親からの身体的虐待で入所していた高校生男子は、母親も児童養護施設出身であることを語り、「お母さんも普通の子育てがわからなかったんだね」と幼少期の自分の身に起きていた出来事の背景を理解していった。

社会的養護の子どもたちが自分の生い立ちや家族との関係を整理する取り組みにライフストーリーワークがある。才村（2009）は、生い立ちに関する質問の書かれたライフストーリーブックに職員と一緒に取り組む方法を紹介しており、「子どもたちに過去を認識させ意味を持たせること、現状とこれまでに起こったことに向き合い、気持ちの整理をつけることを助ける強力な方法」と説明している。X 児童養護施設でもライフストーリーブックを用いてライフストーリーワークに取り組んだケースもあるが、長期的な心理療法をしていると、ゆっくりではあるが自然と同じようなことが行われるような気がする。

7. 長期的な心理支援の意義

少数の心理職で多くの子どもを対象に長期的に心理療法を実施するとなると、その構造はどうしても月1～2回の低頻度となる。山口

(2022) は、成人の低頻度かつ長期の心理面接の意義についてまとめ、バラバラであった人生の物語が大まかではあるものの再構成され、今抱えている問題が何に由来するのかが見えてくるとしている。これは児童養護施設における長期的な心理療法でも共通しているように感じる。また、低頻度かつ長期の心理面接では「オープンエンディッドな終結」を迎えることが多いが、「いざとなったらまた会える」という感覚をクライアントが抱きながら終わることが重要であるとしている。これも施設での心理支援の実状に近い。X 児童養護施設では 18 歳で自立していく退所生を中心に、心理療法のアフターケアの案内を渡している。実際、退所後も施設を訪れて定期的な心理療法を受けたり、必要なときに電話を通して相談したりするケースもある。施設を退所したからといって心理職との関わりが途切れ、心理支援が完全に終結するわけではなく、オープンエンディッドに続いていく場合も多い。

施設においても、ターゲットとする心理的な問題を定めて短期の集中的な心理療法が必要になる場合もあるだろう。しかし、子どもたちが問題を起こしてから心理療法を始めようとする、子どもたちはそこに懲罰的な意味を感じ、心理療法への抵抗を示すことも少なくない。たとえ目に見える問題を抱えていなくても、その前から心理療法を受けていれば、その後、起こる問題についても、中立的な感覚で取り上げることができる。子どもたちが現実場面で起こしたトラブルを心理療法のなかで扱うかどうかは、その子どもの状態などを考慮してケアワーカーと連携しながら決めていくが、あまりにも大きな事件の場合は、施設職員として知らない方が不自然なため、「〇〇さんから聞いたよ」と話題にすることもある。もともと心理職と子どもとのあいだに信頼関係があれば、安心して扱う

ことができる。

8. 子育て支援という視点

施設内でどんなに優れた心理療法を実施しても、それだけで子どもが成長していくわけではない。先にも述べたように、子どもが基本的信頼を築いていくためには施設全体の生活が安定している必要があり、そのためには心理職もケアワーカーと協働して支援にあたる必要がある。そして、その手段としてコンサルテーションは欠かせない。

子どもにとって児童養護施設が「実家」の代わりだとすれば、子どもの生活を支えるケアワーカーは「親」代わりである。例えば、子どものケアにおいて安定したアタッチメントをもつことを目的とした場合、そのアタッチメント対象は月に数回しか会えない心理職ではなく、子どもの毎日の生活を支えるケアワーカーである必要がある。そのため、コンサルテーションにおいて、ケアワーカーへの子育て支援という視点をもつことは大きな助けになる。馬場(2010)は臨床心理士の子育て支援の内容として、(1) アセスメントと対応策の助言、(2) 養育者への援助、(3) 乳幼児への援助、(4) 保育、保険、医療など他職種への援助の四つをあげ、養育者を支えて養育能力を高める援助が重要であるとしている。これは施設心理職の仕事にそのまま置き換えられ、ケアワーカーの養育能力を高めるコンサルテーションが求められる。さらに、X 児童養護施設では施設全体のケア能力の向上を目的に、心理職が講師となって心理教育的な職員研修も実施している。

伊藤(2007)は全国の児童養護施設の若手職員を中心にアンケート調査を実施し、ケアワーカーの 8 割が子どもとの関わりに否定的なストレス(過度な不満や負担感)を感じていることを明らかにする一方で、9 割のケアワーカーが

子どもの成長を強く感じたときに喜びや充実感を感じていることを報告している。子どもにとって親代わりであるケアワーカーが、子どものことで悩み、子どもの成長に喜びを感じるのは自然なことである。

しかし、子どもから最も近い場所で、常に子どもと一緒に過ごしているからこそ、子どもの成長を感じにくいこともある。一般家庭においても、わが子の身長伸びに気づくのは、常に一緒にいる親ではなく、年に数回しか会わない親戚だったりする。それと同じような仕組みで、子どもに月に数回しか会わないからこそ、施設の心理職が気づきやすい子どもの成長がある。目で見える体の成長はもちろんのこと、心理療法は定点観測的に会うことで心の成長についても気づきやすい構造になっている。あるとき、私が心理療法を担当している小学校低学年の子どもの担当ケアワーカーから、「最近、周りの子どもの欠点ばかり指摘するのでトラブルになって困る」と相談を受けたことがあった。落ち着いた生活が送れない大変さを労いながら、「今まで自閉的な世界を生きてきたけど、成長して周囲が見えるようになってきたので、他の子どものことが気になってしょうがない時期かもしれませんね」と伝え、「ああ、成長してるんですね」と納得して、その子どもの問題を抱えやすくなったことがあった。

日々、迷いながら対応しているケアワーカーにとって、目の前の子どもがしっかり成長していると知ることは仕事への大きな活力となる。子どもの成長への気づきを促すようなコンサルテーションは、施設の心理職にとって重要な役割であると考えられる。そのためには、ライフサイクル論(Erikson, 1963)をはじめ、子どもの心理的発達についてケアワーカーにわかりやすく伝えられるように理解しておく必要がある。施設の子どもの心の成長は定型発達よりも遅れ

ていることがほとんどで、実年齢から大きく乖離した課題を抱えていることも多い。子どもが起こしている問題を発達段階と紐づけて理解し、どの段階に進むと収まるのかについての見通しがもてるとケアワーカーは安心して対応できるようになる。

9. 長期的な支援における施設心理職の役割

児童養護施設という疑似家族のなかでケアワーカーが子どもの親の役割を果たすとなると、心理職は子どもの祖父母や親戚のような存在かもしれない。Hall (1999) は、家族における祖父母の果たす「特別な役割」を、家族の状態に合わせてまとめており、「孫には、あらゆる機会をとおして、目の前にある障害を乗り越える勇気を与えてやる」などの具体的な役割が書かれている。この「孫」を「入所児童」に置き換えれば、そのまま施設における心理職の役割のヒントになるように思う。

あるとき、担当している子どもが担当ケアワーカーから厳しく叱られたあとに心理療法の時間になったことがあった。担当ケアワーカーは心理療法の時間があることがわかっていて、「セラピーでフォローしてくれると思って、がつつり叱っておきました」と引き継がれた。負のオーラに満ちた表情で面接室にきた子どもに、叱られたことを聞いたと伝え、「意味が分かんない!」と担当ケアワーカーへの不満が話された。肯定も否定もすることなく子どもの気持ちを受け止めると徐々に落ち着いていき、ケアワーカーが伝えたかったことを通訳すると、「そういうことか」と納得していくことがあった。親代わりであるケアワーカーがしっかりと叱ってくれるから、祖父母代わりである心理職は子どもの気持ちに寄り添うことができる。「オープンルーム」のようなフリースペースの

場が、ケアワーカーがかけるプレッシャーからの避難場所になることもある。上手に役割分担をするためには、心理職が「いいとこ取り」をしていると思われぬように、ケアワーカーと心理職の日ごろの信頼関係も大切である。

親代わりであるケアワーカーは、子どもへの責任感が強く、どうしても心配が先に立ってしまう。祖父母のような心理職は、少し無責任に子どもの力を信じることができる。子どもが成長していくためには、いろいろな距離感をもった大人の存在が大切であり、それがケアワーカーとは異なる心理職という専門職が施設にいることの意義であると考えられる。

10. さいごに

心理療法を担当していた子どもが施設内で大きな事件を起こし、他の施設に措置変更となってしまうことがある。施設を退所する日、担当ケアワーカーが児童相談所まで車で送りながら、「もしも、時間が戻せるならばいつに戻りたい?」と聞いた。ケアワーカーは事件を起こす前と答えると想定しての質問だったが、その子どもは「それは自分が生まれる前だよ」と答えた。施設の子どもたちの課題の根源を探るとその出生にたどりつく。なぜ、自分は生まれてきたのか。そして、なぜ、生きていかなければならないのか。その課題に心理職として答えることはできない。施設に在籍しているうちにその答えを見つけることも難しいのではないかと思う。答えの一つとして、子どもたちが施設を退所したあとに自分の子どもを授かる機会に恵まれ、その子育てを通して、その子どものために生まれてきたのだとを感じるような日がくるかもしれないと勝手に想像している。いずれにしても、そのくらいの長期的な視点で取り組んでいく課題であろう。

そうすると、児童養護施設でしなければなら

ない支援は、子どもたちの在籍中はそのような人生を送れるような土台を築くことであり、退所後もできるかぎりのサポートを続けることもかもしれない。心理職として、そのために何ができるのかを考え続けることが、児童養護施設における長期的な心理支援において必要となる。

▶文献

- 馬場禮子 (2010). 臨床心理士の子育て支援について
臨床心理士子育て支援合同委員会 (編) 臨床心理士
のための子育て支援基礎講座 創元社, 13-18.
- Erikson, E. H. (1963). *Childhood and Society*. New York:
W. W. Norton. 仁科弥生 (訳) (1977). 幼児期と社
会 1 みすず書房.
- Hall, C. M. (1999). *The Special Mission of Grandparents:
Hearing, Seeing, Telling* Praeger Pub Text. 吉井 弘
(訳) (2001). 祖父母の特別な役割——聞くこと・
見ること・話すこと—— 誠信書房.
- 伊藤嘉余子 (2007). 児童養護施設におけるレジデ
ンシャルワーク——施設職員の職場環境とストレス
—— 明石書店.
- こども家庭庁 (2024). 児童養護施設入所児童等調査の
概要 (令和 5 年 2 月 1 日現在). [https://www.cfa.
go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_
resources/8aba23f3-abb8-4f95-8202-
f0fd487fbe16/5c104d63/20240229_policies_shakai-
teki-yougo_86.pdf](https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/8aba23f3-abb8-4f95-8202-f0fd487fbe16/5c104d63/20240229_policies_shakaiteki-yougo_86.pdf) (閲覧日: 2025.7.9).
- 才村真理 (2009). 生まれた家族から離れて暮らす子ど
もたちのためのライフストーリーブック 福村出版.
- 塩谷隼平 (2016). 児童養護施設における心理支援の実
践についての一考察 東洋学園大学紀要, 24, 1-12.
- 山口貴史 (2022). 低頻度かつ長期の心理面接の意義
心理臨床学研究, 40 (2), 127-137.

Long-term psychological support in Japanese children's home

SHIOYA, Shumpei

Toyo Gakuen university

Journal of Child Welfare and Psychology 2025, Vol.2, 10-18

Abstract:

This paper examines long-term psychological support in Japanese children's home. Children there lack the basic trust, and in order to gain it, they need a stable and secure life for the long term. A long-term perspective is also important when providing psychological support in facilities. Children's home X provides customized psychological therapy, including individual psychotherapy. During long-term psychotherapy, the themes expressed by children change according to their developmental stage. In addition, psychologists at facilities need to provide consultations for care workers from the perspective of child-rearing support. Furthermore, for children to grow up, they need adults with various senses of distance. Therefore, it is important for psychologists to play the role of grandparents in children's home to provide long-term psychological support.

Key words: children's home, long-term, psychological support